

仙台市文化財調査報告書第21集

仙台市開発関係遺跡調査報告 1

茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査略報

原町東部第三土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告

昭和 55 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第21集

仙台市開発関係遺跡調査報告 1

茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査略報

原町東部第三土地区画整理事業地内遺跡発掘調査報告

昭和 55 年 3 月

仙 台 市 教 育 委 員 会

例 言

1. 本書は、茂庭住宅団地造成工事に係る、沼原A遺跡・沼原B遺跡・梨野A遺跡・梨野C遺跡・嶺山遺跡の発掘調査略報告書及び仙塩広域都市計画原町東部第三土地区画整理事業に係る、明屋敷遺跡・鶴巻I遺跡・鶴巻II遺跡・地蔵裏遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書収録遺跡の発掘調査は、仙台市教育委員会社会教育課が担当した。
3. 土層の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人・日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帖を使用した。
4. 本書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行のものを複製したものである。
5. 本書の作成にあたり、森 剛男（県文化財保護指導員）・阿部朝衛（東北大学大学院生）・石黒伸一朗・熊谷信人・真山尚幸（以上東北学院大学生）の各氏の協力を得た。
6. 出土遺物については、東北大学助教授須藤 隆氏・宮城県教育庁文化財保護課技師丹羽茂氏の御教示を得た。
7. 茂庭住宅団地造成工事に係る遺跡の略報告書の執筆・編集は、佐藤甲二・渡部弘美が担当した。
8. 原町東部第三土地区画整理事業に係る遺跡の報告書の執筆は、工藤哲司が担当し、編集は木村浩二との両名で行なった。
9. 本書に関する遺跡からの出土遺物は、仙台市教育委員会に一括保管している。

目 次

茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査略報

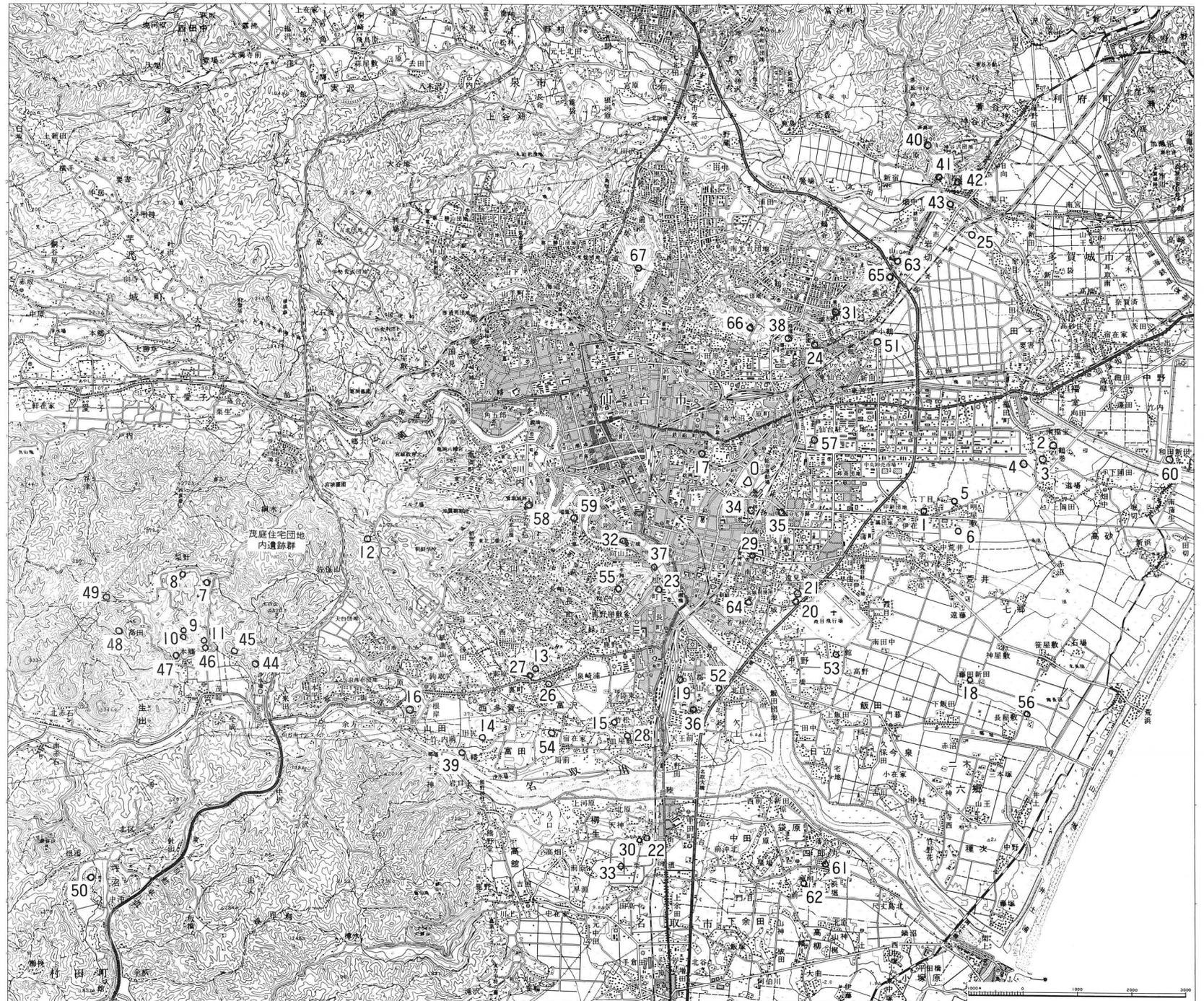
調査に至る経過	3
自然環境及び周辺の遺跡調査の方法と経過	3
1. 沼原 A 遺跡	7
2. 沼原 B 遺跡	13
3. 梨野 A 遺跡	17
4. 梨野 C 遺跡	21
5. 嶺山 遺跡	23

原町東部第三土地区画整理事業地区内遺跡発掘調査報告

調査に至る経過	29
地理的・歴史的環境	29
1. 明屋敷 遺跡	33
2. 鶴巻 I 遺跡	41
3. 鶴巻 II 遺跡	45
4. 地蔵浦 遺跡	49

遺跡地名表

番号	登録	遺跡名	34	C-419	陸奥国分寺跡
1	C-168	北屋敷遺跡	35	C-420	陸奥国分寺尼寺跡
2	C-224	鶴巻I遺跡	36	C-104	郡山遺跡
3	C-225	鶴巻II遺跡	37	C-033	宗禪寺横穴古墳群
4	C-226	田子遺跡	38	C-412	安養寺下窯跡
5	C-234	明屋敷遺跡	39	C-148	八幡西遺跡
6	C-235	地藏裏遺跡	40	C-502	岩切城跡
7	C-180	梨野A遺跡	41	C-508	東光寺城跡
8	C-244	梨野C遺跡	42	C-522	若宮前遺跡
9	C-245	沼原B遺跡	43	C-200	今市遺跡
10	C-246	嶺山遺跡	44	C-503	茂庭東館跡
11	C-247	沼原A遺跡	45	C-503	〃本館跡
12	C-194	青葉山遺跡	46	C-515	〃峯館跡
13	C-106	三神峯遺跡	47	C-515	〃西館跡
14	C-108	上野遺跡	48	C-517	〃大館跡
15	C-197	六反田遺跡	49	C-517	〃小館跡
16	C-195	上ノ台遺跡	50	C-516	根添館跡
17	C-159	天神社遺跡	51	C-509	小鶴城跡
18	C-103	藤田新田遺跡	52	C-505	北目城跡
19	C-105	西台畑遺跡	53	C-506	沖野館跡
20	C-102	南小泉遺跡	54	C-520	富沢館跡
21	C-001	遠見塚古墳	55	C-504	茂ヶ崎城跡
22	C-113	安久東遺跡	56	C-243	岡崎囲遺跡
23	C-002	兜塚古墳	57	C-510	南ノ目館跡
24	C-415	大蓮寺窯跡	58	C-501	仙台城跡
25	C-135	鴻ノ巣遺跡	59	C-605	瑞鳳殿跡
26	C-008	裏町古墳	60	C-523	和木屋敷跡
27	C-417	富沢埴輪窯跡	61	C-012	城丸古墳
28	C-038	大野田古墳群	62	C-011	弁天囲古墳
29	C-003	法嶺塚古墳	63	C-005	千人塚古墳
30	C-037	安久諏訪古墳	64	C-511	若林城跡
31	C-027	善応寺横穴古墳群	65	C-101	燕沢遺跡
32	C-028	愛宕山横穴古墳群	66	C-407	与兵衛沼窯跡
33	C-136	栗遺跡	67	C-403	五本松窯跡



仙台市の主要遺跡と茂庭住宅団地内遺跡群・原町東部第三土地区画整理事業地内遺跡群の位置

茂庭住宅団地造成工事地内

遺跡発掘調査略報

—昭和54年度—

調査に至る経過

仙台市は将来の人口増加・住宅難解消問題に備えて、新しい住宅団地計画を立案し候補地選定を進めていたが、昭和48年11月に仙台市茂庭地区を造成地区として決定した。当計画は茂庭北部の梨野～本郷地区にはさまれた標高100～200 m内外の丘陵地約 130haを開発対象面積とした大規模なものである。

当初、造成工事地内には周知の遺跡が二ヶ所含まれていたが、より詳細な文化財分布資料の提示が必要とされ、分布調査を実施することとなった。昭和51年12月に調査が行なわれ、分布調査の報告書が刊行された。^(註1)この資料をもとに仙台市開発局・仙台市教育委員会の両者間で今後の対処について協議が行なわれた。

昭和53年度より分布調査で確認された地点の予備調査を行なうこととなり、初年度として三地点4ヶ所（①石器表採地点、②土器散布地点、③炭窯跡）の調査が実施された。

自然環境と周辺の遺跡

茂庭地区周辺の地形を概観してみると、北部の丘陵地帯と南部の低地面とに大きく分けることが出来る。北部の丘陵地帯は、奥羽山脈よりのびる仙台市西部外縁丘陵が、ゆるやかに屈曲した地形をみせて広がり、^(註2)亀ヶ森や太白山などの火山性山地が点在している。南部においては名取川が東流し広範囲にわたる段丘面を残し、肥沃な低地面が形成され水田として利用されている。

茂庭住宅団地造成工事に係る遺跡は、北部の丘陵地内、仙台市茂庭字立石・大堤・沼原・嶺山に所在している。丘陵地北部の梨野地区には、平坦面が東西約 1.5 kmにわたり広がり、平坦面両端からは名取川水系の岩ノ川・大堤川が南流し谷地形を形成して、あたかも周辺地域から独立したような地形となっている。当丘陵地の標高は約100～200m程の全体に起伏の少ない地形であるが、中央部には幾つかの窪地地形もみられる。

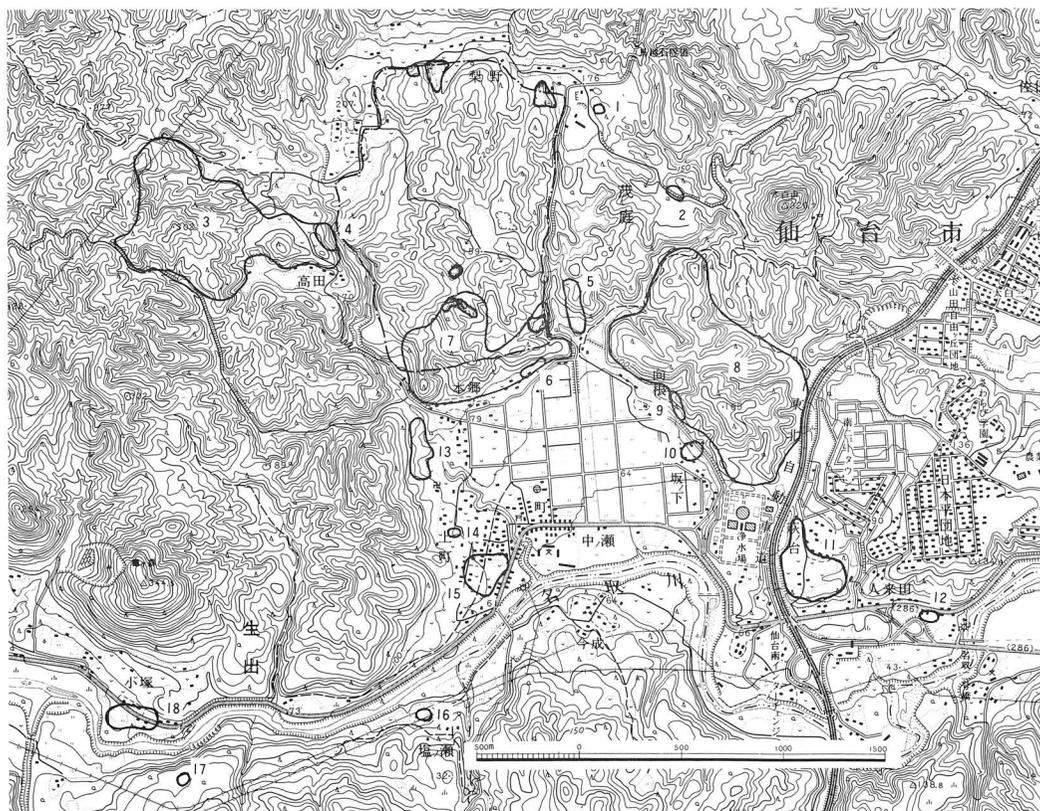
茂庭造成計画地周辺部には、古くから知られる中世の館跡（茂庭大館・茂庭西館・峰館・けんとう城）が群在し、^(註3)茂庭低地（生出・本郷地区）周辺の丘陵部には、縄文時代の新組遺跡・西前遺跡、縄文～平安時代の向根遺跡、弥生～平安時代の坂ノ下遺跡、奈良・平安時代の本郷遺跡などがある。

調 査 概 要

発掘調査は昭和54年5月7日に開始され12月10日まで行なわれた。調査箇所は五地点7ヶ所を数え、発掘対象面積は約28,000㎡にのぼった。このうち、梨野A・梨野C遺跡以外の地点は館跡に関連するものとして「平場」と総称されていたが、名称として不都合な点が見られたので、当地の字名を用いて遺跡名とし使用することにした。

調査は沼原A第1地点～梨野C～沼原B～嶺山東西～梨野A～沼原A第2地点の順で行なっていた。予備調査という性格上、全面発掘は行なわずトレンチ・グリッド方式で遺構等の確認を進めていったが、何ら検出されない地点もあり調査を終了したものもある。調査の成果として、住居址・土壌・ピット・遺物包含層が確認されている。

二年度にわたる調査を実施し、梨野A・嶺山西区・沼原A第2地点の3遺跡は本調査を必要とし、昭和55年度調査分と併せて調査を継続して行く予定である。



- | | | | | | |
|------------|----------|----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 馬越石塚 | 2. 梨野横穴群 | 3. 茂庭大館 | 4. カナクソ遺跡 | 5. 向根遺跡 | 6. 本郷遺跡 |
| 7. 茂庭西館 | 8. けんとう城 | 9. 向根横穴群 | 10. 坂ノ下遺跡 | 11. 人來田遺跡 | 12. 人來田C遺跡 |
| 13. 門野山囲遺跡 | 14. 西前遺跡 | 15. 新組遺跡 | 16. 塩ノ瀬遺跡 | 17. 大貝下遺跡 | 18. 川添東遺跡 |

第1図 造成地内遺跡群と周辺の遺跡



- ① ~ ③ 昭和53年度予備調査分
- 昭和55年度調査子定

第2図 造成地内遺跡群位置図

沼原 A 遺跡

(C-247)

遺跡所在地：仙台市茂庭字沼原28

調査期間：第1地点 昭和54年5月7日～10月12日

第2地点 昭和54年11月12日～12月10日

発掘面積：第1地点 2,650㎡ 第2地点 750㎡

調査面積：第1地点 1,413㎡ 第2地点 150㎡

担当職員：佐藤甲二・渡部弘美・篠原信彦・田中則和

1. 遺跡の立地

沼原 A 遺跡は峰館の北東、一つ沢を隔てた丘陵中段平坦部に位置し、東約 150 m には縄文時代から平安時代までの向根遺跡がある。遺跡は東にゆるやかな下り勾配の80×30m、標高 125 m 前後の平坦部で、茂庭低地との比高は約60mである。遺跡の北側・西側は標高140 m 前後の丘陵頂部へ急傾斜で至り、南側・東側は沢・県道（菅生～折立線）への下り急斜面となる。

2. 調査の方法

○第1地点 標高120mから125mの間に広がる平坦部分を調査対象とした。磁北から約 20° 西に傾くラインを縦軸（A～R）これに直交するラインを横軸（1～34）とする 3×3 m グリッドを設定。F・I・L・O列を基本グリッドとし状況に応じ拡張を行う。

○第2地点 遺跡の北西側にある長さ約60m、幅約15mの谷部分（標高125～135m）を調査対象とした。等高線と交わるラインを横軸（1～13）これに直交するラインを縦軸（II A～II D）とし、3×3 m のグリッドを設定。II C列を基本グリッドとし状況に応じ拡張を行う。

3. 調査の概要

基本層位は両地点とも第 I 層耕作土から第 VIII 層粘土質及び凝灰岩質の地山までの 8 層から成る。第 IV・VI 層は遺物包含層で、第 IV 層より奈良時代・平安時代、第 VI 層よりは縄文時代前期・中期・後期・晩期・弥生時代中期の遺物を出土する。検出遺構は第 1 地点より住居址 1 棟・土壇 6 基、第 2 地点より土壇 1 基（上面確認のみ）が検出された。以上の他に H-13 グリッド第 VI 層中よりはほぼ完形の縄文時代晩期の鉢を出土したが、これに伴う遺構は検出されなかった。

〈住居址〉第1地点の西側で1棟検出された。北壁にカマドを持ち、一辺約4mの方形プランを呈する

平安時代の住居である。張り床が一部施されている。当住居は床面直上から多量の木炭が出土し、火災を受けたと考えられる。柱穴は床面・住居外からも検出されなかった。カマドは数個の石で袖を構築し、煙出部に胴下半欠失の須恵器の甕が埋められていた。住居床面及びカマド焚き口より実測可能な土師器の甕が2点、須恵器の甕の破片が1点出土している。

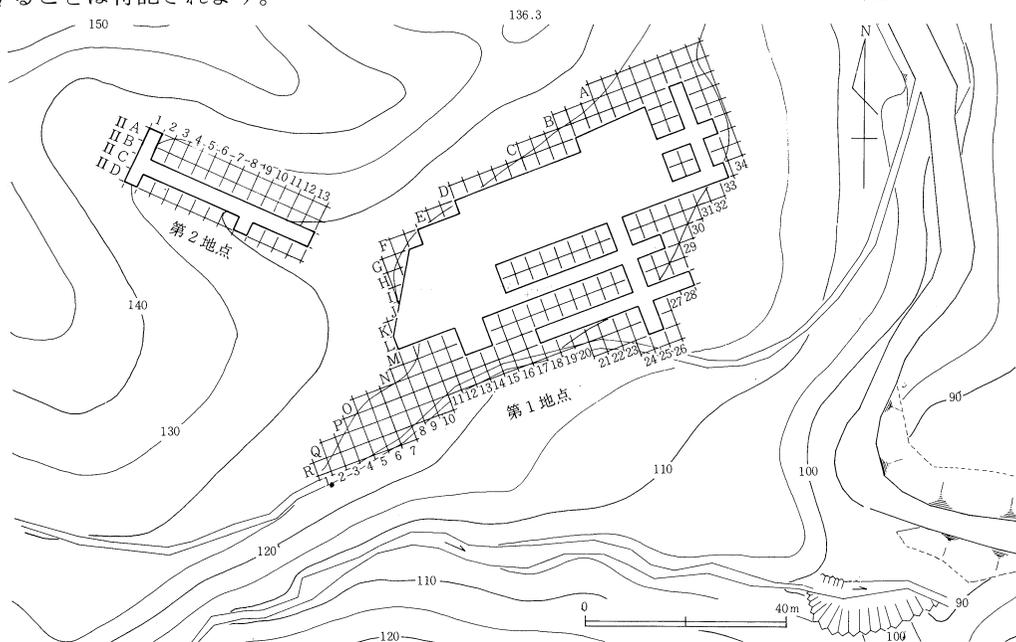
〈土壌〉第1地点より6基検出され、第2地点（II C-9）では1基確認された。第1地点6基は全て中段を有し、上端は隋円形、中段・下端が隅丸長方形を呈し、上端190×150cm・中段150×60cm・下端140×40cm・深さ160cm前後のものが多い。床面の四隅に直径7cm前後のPitを伴うもの（2号）、中央部にもう1つPitを持つもの（6号）があるが他の4基にはPitは伴わない。これら土壌は第VI層中より地山層まで掘り込まれ、縄文時代前期から弥生時代中期までのいずれかの時期に所属すると思われる。土壌覆土中より遺物はほとんど出土しなかった。

4. ま と め

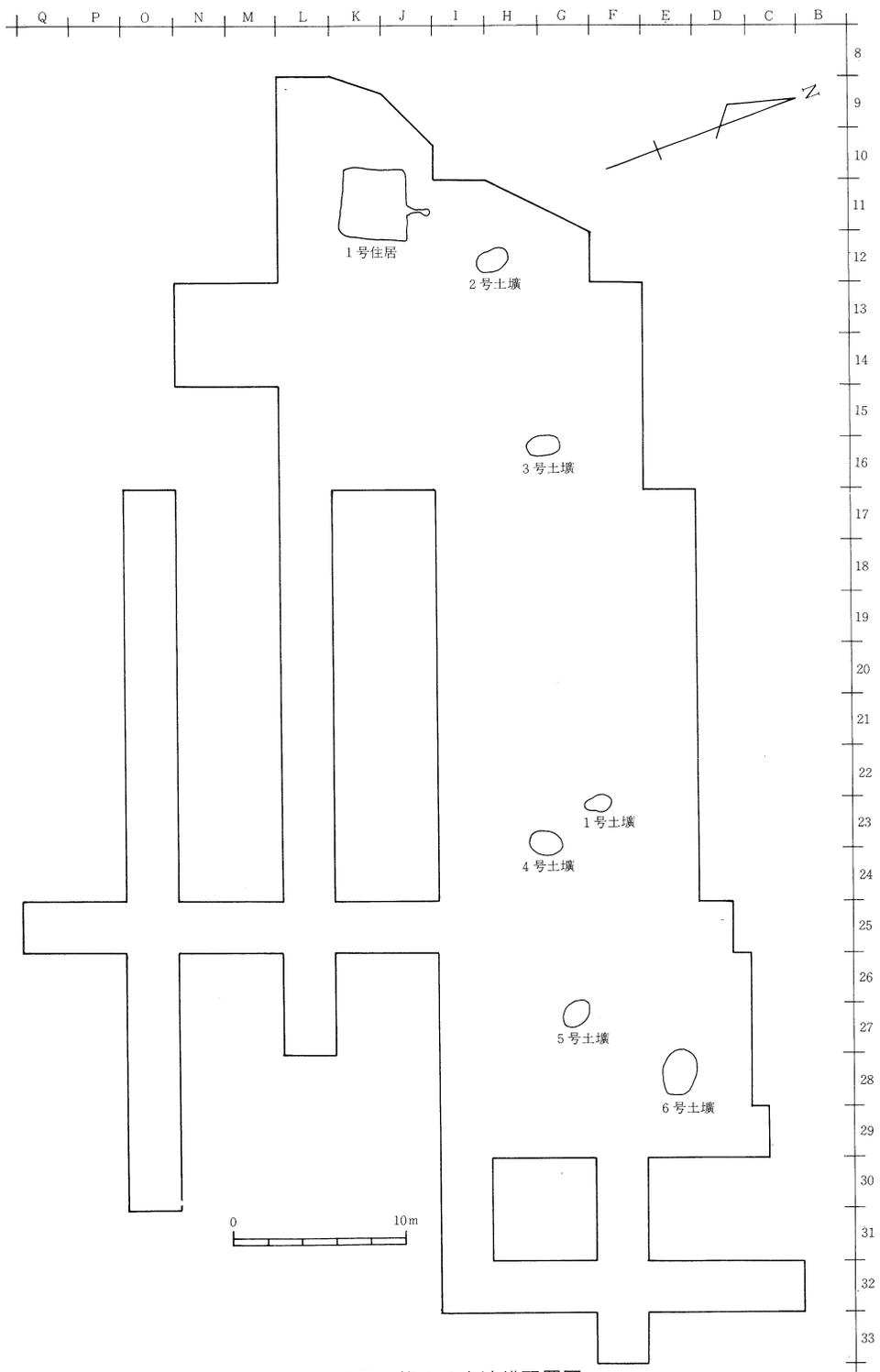
○第1地点は平安時代の住居址1棟、縄文時代前期から弥生時代中期までのいずれかの時期に作られたと考えられる土壌6基が検出された。第2地点は第1地点の西側で出土したほぼ完形の縄文土器が、当谷部分よりの流出ではないかという観点と、住居址・土壌のひろがり調査する目的で試掘が為された。この結果、土壌1基及び遺物包含層が確認され、来年度谷全体にわたる本調査が必要となった。

○両地点で発見された土壌は、形態・規模・出土遺物が少ない点よりいわゆる「Tピット」・「陥穴」^(註4)と呼ばれる土壌に酷似している。また北側の丘陵際に浴う凹地や谷に、これら土壌が配置することは特記されよう。

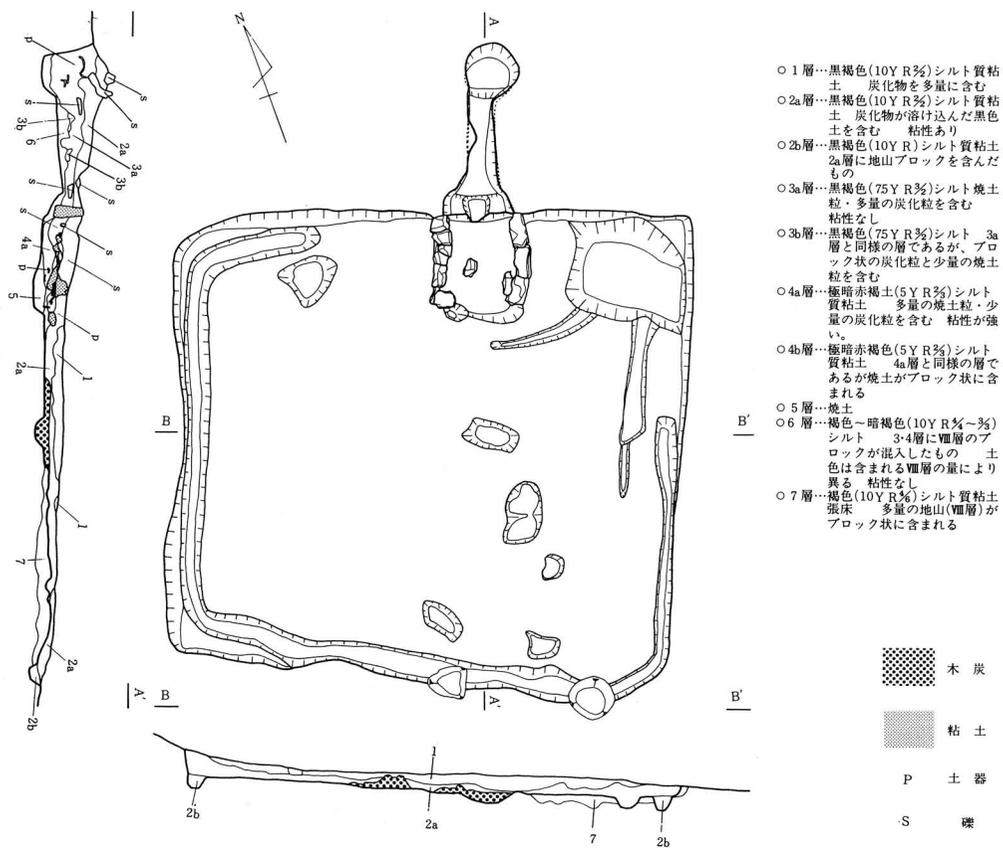
(佐藤甲二)



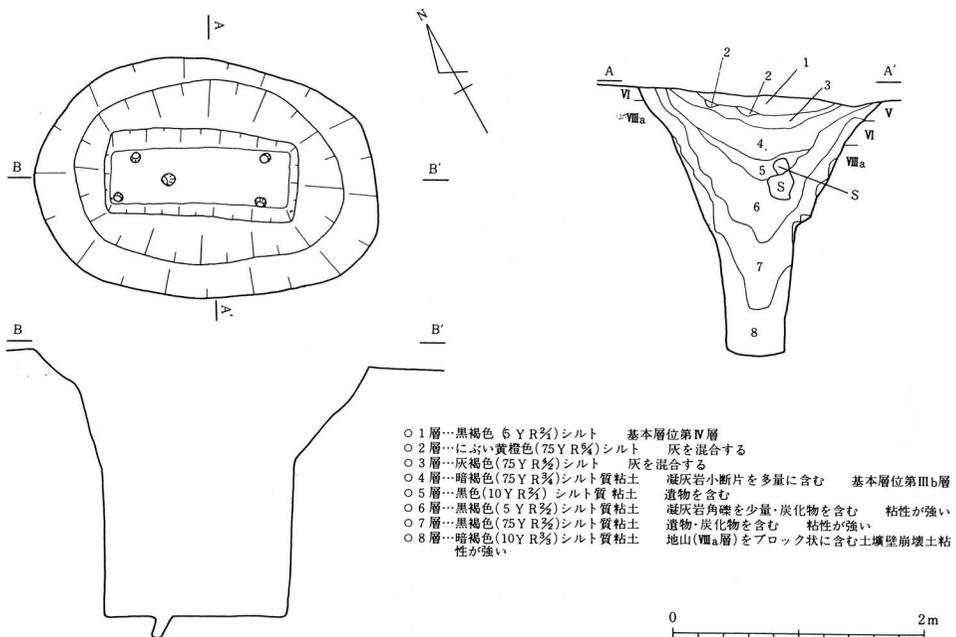
第1図 グリッド配置図



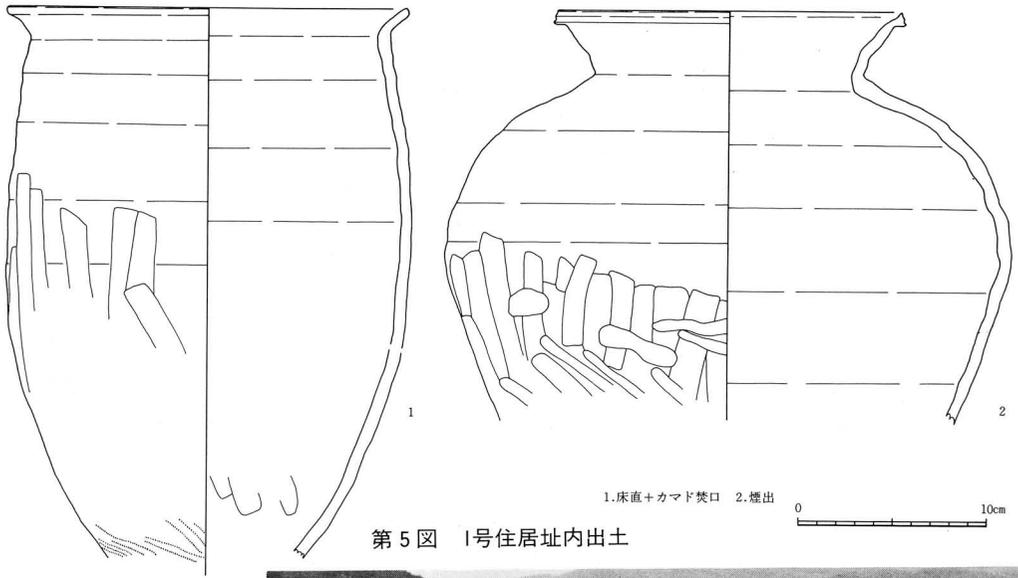
第2図 第1地点遺構配置図



第3図 I号住居址



第4図 6号土壌

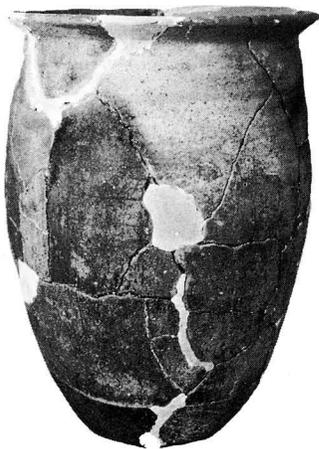




1号住居址
(西より)



3号土坑
(南より)



1号住居址内出土



1号住居址内出土



H-13グリッド第Ⅵ層中出土

沼原 B 遺跡

(C-245)

遺跡所在地：仙台市茂庭字沼原28

調査期間：昭和54年8月23日～10月5日

発掘面積：1,800m²

調査面積：500m²

担当職員：渡部弘美・佐藤甲二・佐藤 洋

1. 遺跡の立地

沼原B遺跡は造成計画地のほぼ中央部南側、標高180～200mの丘陵に囲まれた窪地の南側斜面に位置している。この窪地は周囲の地形に較べ一段と低くなっており高低差は約20～40m程ある。窪地底部は湿地帯となっており萱などが群生する原野となっている。遺跡の南西150mの地点には同じような立地の嶺山遺跡西区がある。

2. 調査の方法

当初、沼原B遺跡は礎石と思われる割石・微傾斜の地形等から館跡に関する平場とされていた所である。

調査は上記の点を鑑み、地形に沿った6×6mを単位としたグリッドを設定した。グリッド名は南北方向に縦軸（A～E）・東西方向に横軸（1～9）で表わした。最終的に14のグリッドを開放している。

3. 調査の概要

最終的には湿地帯際までを対象とした約500m²の調査を行なった。その結果、集石1基、ピット群・遺物が発見された。基本層位は6層確認されている。

〈集石〉A-2・3グリッドで検出された。傾斜面に築かれ相当量の石が崩れ落ち平面形はいびつな四角形を呈している。規模は、長軸3.9m・短軸3.0mを計り、主軸方向は北東～南西方向をさす。使用されている石の大きさは10cm程のものから60cm程までと様々なものが用いられ、積み方にも規則性はみられなかった。石質は火山性の礫である。

尚、集石の北東脇より砥石が1点出土している。

〈ピット群〉 C・D-7・8・9 区の第Ⅵ層上面において約 100 個程検出された。またピット上面においては、縄文時代晩期後葉より弥生時代中期頃までの遺物が集中してみられた。

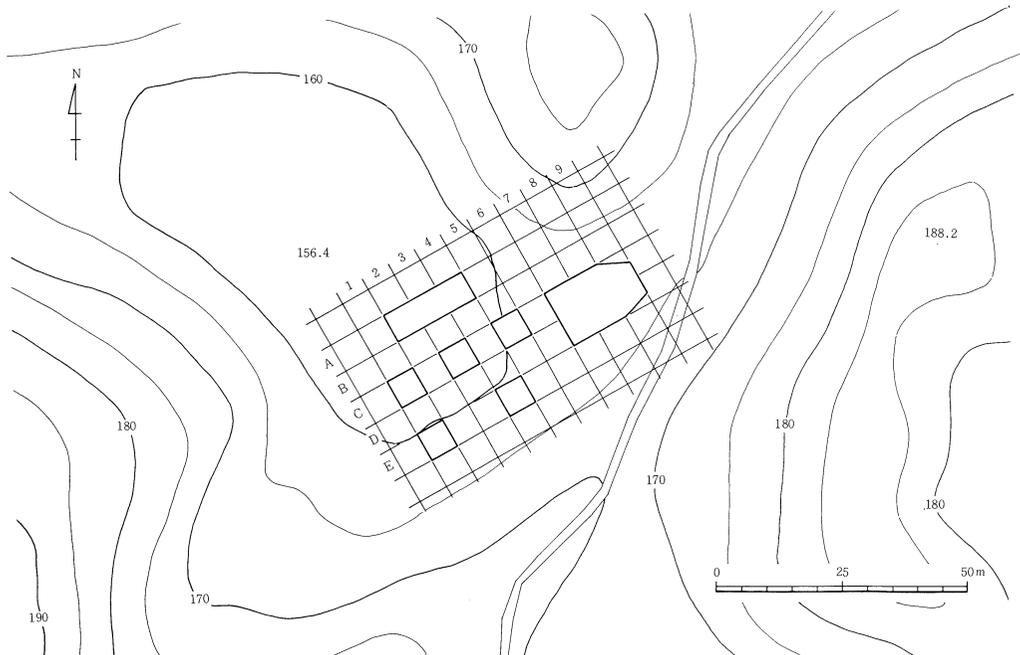
4. ま と め

○沼原B遺跡は当初、館跡に関連する遺跡と思われていたが、今回の調査ではそのような遺構・遺物は検出されなかった。

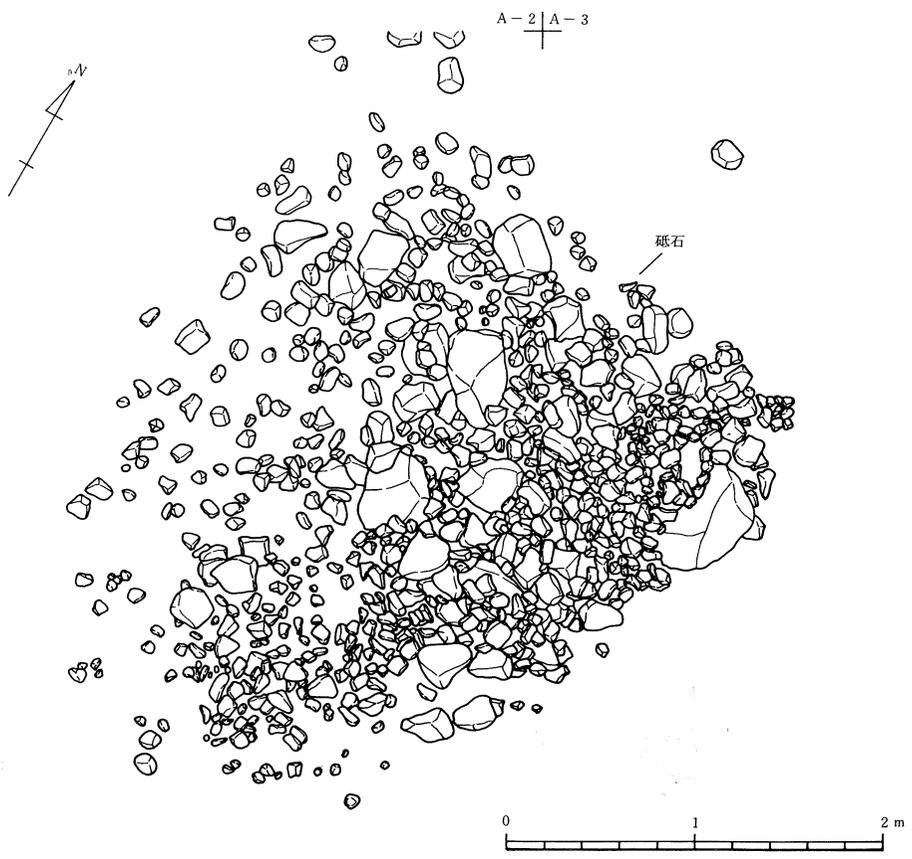
○今回の調査では、時期不詳の集石 1 基、縄文時代晩期後葉から弥生時代中期頃のいずれかの時期に属すると思われるピット群と多数の遺物が検出された。これらの配置・組み合わせ・性格は今後の整理結果を待って述べたい。

○当地区は、湿地を伴う大きな窪地であり、定住の場としてはかなり不向きな場所と考えられる。しかし、弥生時代中期頃の遺構・遺物が検出されたことは、当時この場所が何らかの生活の場として使用されたことは確かであろうと思われる。

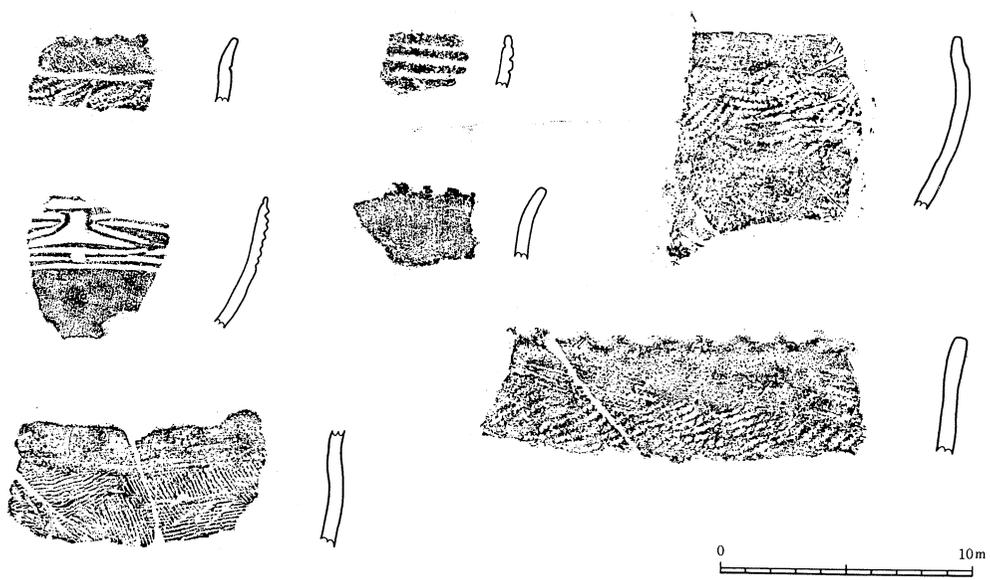
(渡部弘美)



第1図 グリッド配置図



第2図 集石平面図



第3図 出土遺物拓影図



グリッド配置
(西より)



集石検出状況
(東より)



ピット群検出状況
(東より)

梨野 A 遺跡

(C-180)

遺跡所在地：仙台市茂庭字大堤

調査期間：昭和54年10月22日～11月12日

発掘面積：1,250㎡

調査面積：1,050㎡

担当職員：佐藤甲二・渡部弘美

1. 遺跡の立地

梨野 A 遺跡は、縄文時代前期から土師器・須恵器までの時期の散布地として、古くから知られている。当遺跡は造成計画地内の北東隅にあたり、東と西には浅い谷が走り、南は茂庭丘陵地帯へ連なり、北は梨野平坦面へと続く緩斜面を持つ、標高 194 m を頂点とする、北北東へのびるゆるやかな舌状の平坦面に位置する。遺跡北東約 100 m の所で東流を続けていた大堤川は、大きく向きをかえ茂庭低地へと南流する。この台地の先端部近くは、東西に走る団地内環状線によりすでに寸断されている。

2. 調査の方法

舌状地形に沿った形で、遺跡全面に6×6mのグリッドを設定し、本年度調査地域である西側傾斜面部分の調査を行った。

3. 調査の概要

第 I 層表土下が凝灰岩質の地山面となり、表土の厚い所で約50cm、薄い所では地山面が露出していた。当初、遺物の流れ込みが多少なりともあると思われたが、小土器片が表土中より数点出土したのみで、遺構に関しては皆無であった。

4. まとめ

○本年度調査分、西側斜面では表土 I 層のみで遺物包含層・遺構は検出されず、わずかに縄文時代に所属すると思われる小土器片が数点出土しただけであった。

○遺跡平坦部において、土器片・石器が多く表面採集でき、この結果より平坦部には、何らかの遺構の存在が考えられる。しかし当遺跡は以前に開墾を受けており、また全ての土器片に著

しい摩滅がみられることより、遺構はかなり破壊されている可能性がある。

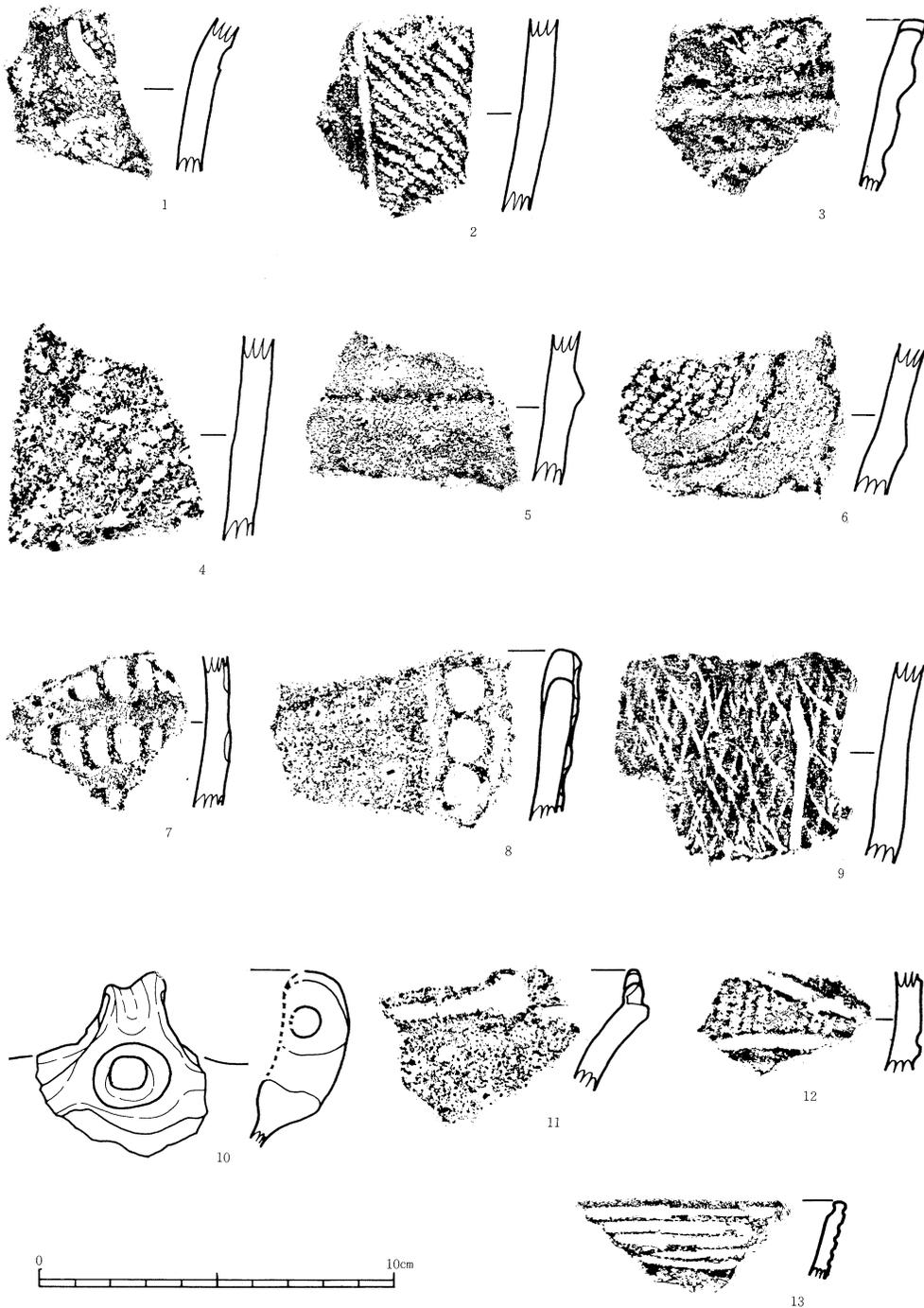
(佐藤甲二)



第1図 グリッド配地区

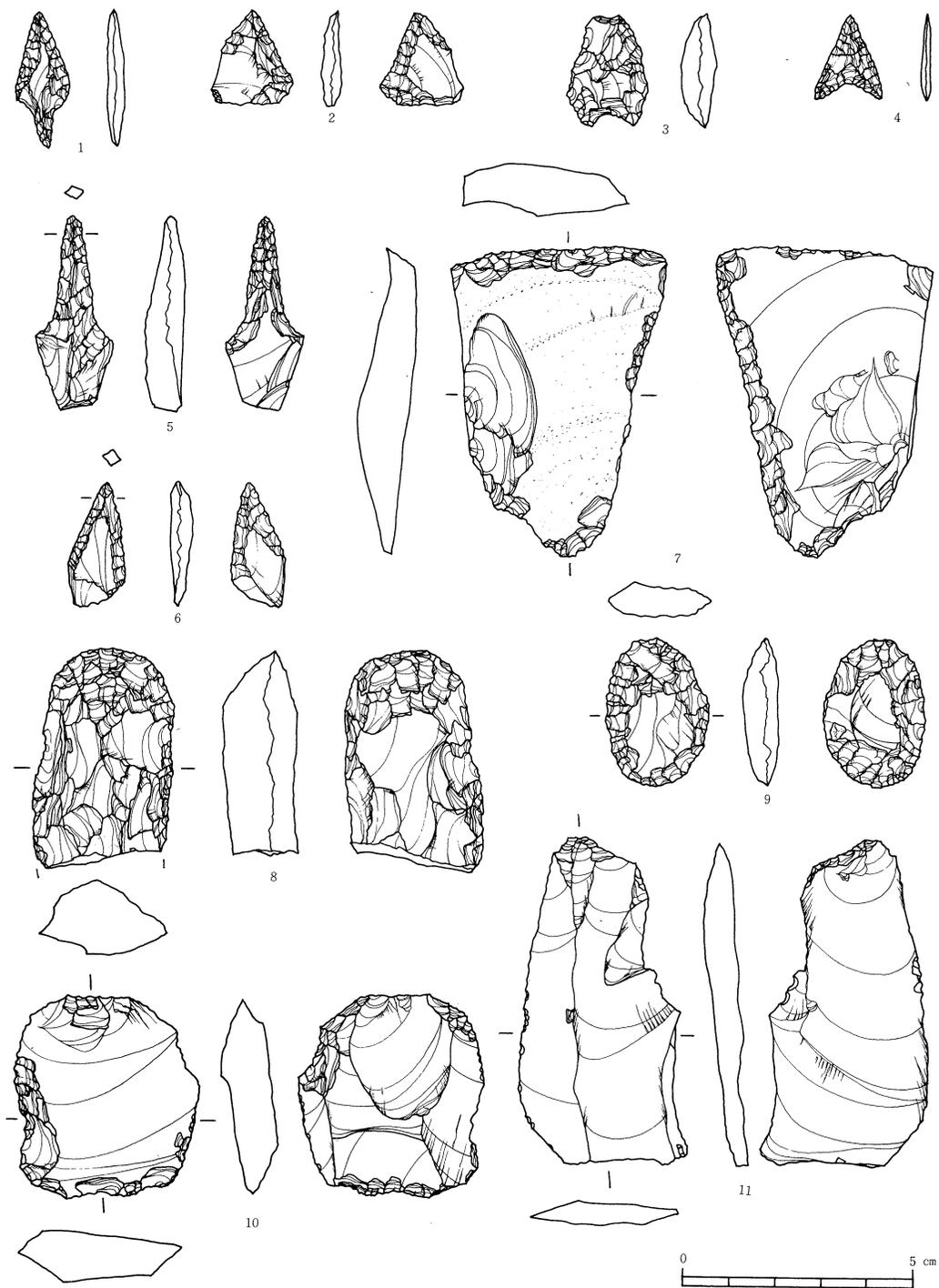


グリッド配置
(北西より)



1~2 縄文中期後葉 3~6 縄文中期末葉 7~9 縄文中期末葉~後期前葉 10~12 縄文後期前半 13 縄文晚期後半

第2図 表面採集資料(土器)



1-4 石鏃 5-6 石錐 7-8 鏃状石器 9-11 その他の石器

第3図 表面採集資料(石器)

梨野 C 遺跡

(C-244)

遺跡所在地：仙台市茂庭字立石

調査期間：昭和54年7月10日～8月25日

発掘面積：15,000m²

調査面積：1,361m²

担当職員：渡部弘美・木村浩二

1. 遺跡の立地

梨野C遺跡は造成計画地北部の梨野平坦地に位置し、南側からのびる丘陵北側の扇状に広がる標高200m内外の沖積地に立地している。遺跡の東方500mの地点には梨野A遺跡、西方60mの地点には梨野B遺跡が位置している。当地買収以前は水田・畑地となっていた。

2. 調査の方法

対象面積も広く予備調査という点から、地形に沿うような形で3m幅のトレンチを設定する。南北ラインを主軸トレンチとし、それに直交するトレンチを6本、計7本のトレンチを配し調査を行う。

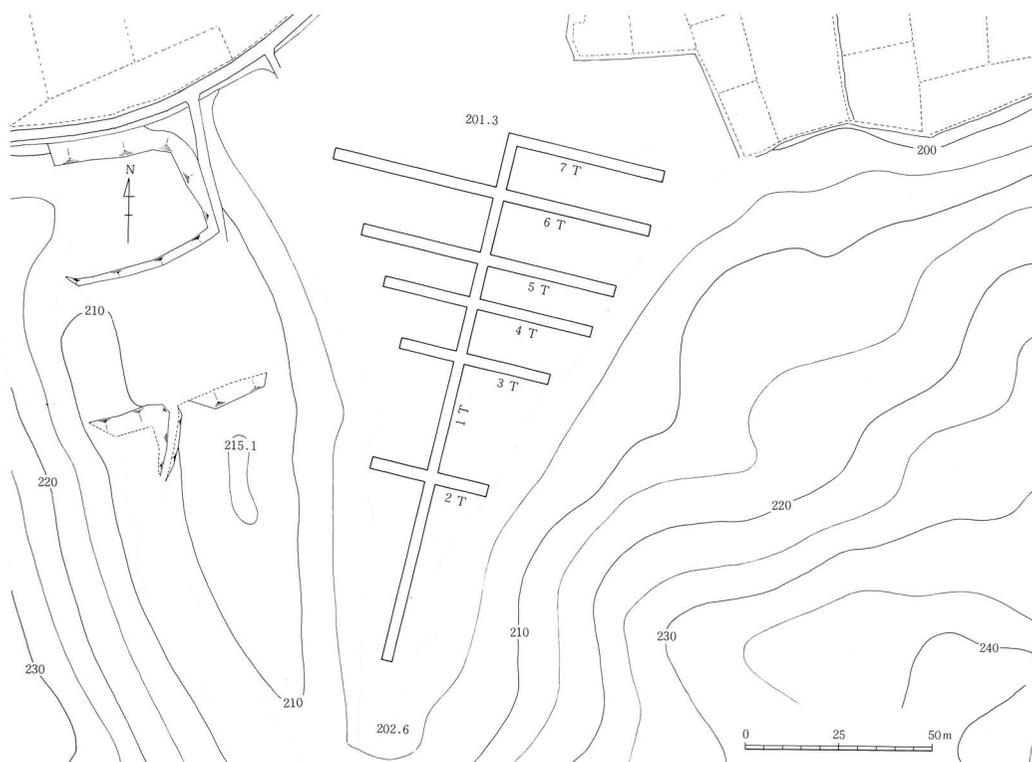
3. 調査の概要

最終的には約1,400m²の調査を行なった。基本層位は、第1層耕作土から第V層粘土質の地山面までの5層から成る。しかし調査区南側の一部を除き、ほとんど第1層下が地山面となる。若干の土器片（縄文土器・土師器・須恵器・陶磁器）が耕作土中より出土したのみで、遺構は検出されなかった。

4. まとめ

○本地区は梨野B遺跡が西方に位置し、広範囲な平坦面が続く点より遺構等の存在が考えられたが、調査において出土した少量の遺物は、全て第1層耕作土中からであり、関連する遺構も検出されず、遺跡とする確証は認められなかった。

(渡部弘美)



第1図 トレンチ配置図



トレンチ配置 (南東より)

嶺 山 遺 跡

(C-246)

遺跡所在地：西区 仙台市茂庭字嶺山19
東区 仙台市茂庭字沼原28
調査期間：西区 昭和54年10月9日～10月11日
東区 昭和54年10月12日～10月19日
発掘面積：西区 2,500㎡ 東区 3,900㎡
調査面積：西区 45㎡ 東区 225㎡
担当職員：渡部弘美・佐藤甲二

1. 遺跡の立地

嶺山遺跡は沼原A遺跡の東南約350m、沼原B遺跡の南方約150mに位置し、標高165～170m前後の台地部分と谷部分に分けられる。台地部分を東地区、台地部分を西地区とした。

東地区は北西を除く三方を谷に囲まれ、南東に向ってゆるやかな下り傾斜を示す、長さ120m幅40m前後の舌状の台地を形成する。西地区は東地区とは逆に、北東を除く三方を丘陵に囲まれ、北東にひらく、幅25m長さ90mの谷を形成する。

2. 調査の方法

嶺山遺跡は本年度試掘調査であることを踏まえ、両地区とも6×6mグリッド中の4分の1部分（基本的には北東杭側の3×3m）を開放する方法を採用した。

○東地区 等高線に交わるラインを横軸（1～19）、これに直交するラインを縦軸（IIA～IIE）としてグリッドを設定し、IIC・IIDを中心として計25グリッドを調査した。

○西地区 谷に沿うラインを横軸（1～16）、これに直交するラインを縦軸（A～E）としてグリッドを設定し、谷中央線上に位置する、C列中の5グリッドを調査した。

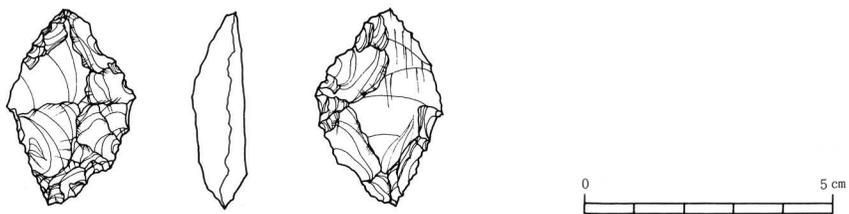
3. 調査の概要

○東地区 第I層表土下が粘土質及び凝灰岩質の地山となり、遺物・遺物包含層・遺構は皆無であった。第I層表土は厚い部分で約20cm、薄い部分では約5cmである。

○西地区 基本層位は第I～VIII層までの8層から成る。第I層は表土、第VIII層は大礫混じり



第1図 グリッド配置図



第2図 C-13グリッド第Ⅴ層上面出土のポイント

東区 グリッド配置
(北より)



西区 グリッド配置
(北西より)



の地山となる。V層は縄文時代の遺物包含層と思われる。発見遺構はC-13グリッド第V層上面で、平面プラン160×70cmの不正隋円形の落ち込みが確認されたが、本年度は上面確認のみにとどめた為、この土壌の正確な規模・性格は不明である。遺物はC-10・13グリッド第V層より土器片・ポイント・二次加工のある剥片が各1点出土したのみである。小土器片は風化が激しく時期を決定し難いが、石器よりこれら遺物は縄文時代に属すると思われる。

4. ま と め

○東地区 当地区は造成計画地内では、遺跡の立地に比較的良好な平坦面をもつ台地であったが、試掘調査の結果は1片の土器さえ出土しなかった。この地区は調査前まで梅林であった場所で、以前に開墾を受け現平坦面が作り出された可能性がある。いずれにしても当地区は遺跡として認定し難い。

○西地区 C-4グリッドでは地山面まで非常に深く地表下約2mであるのに対し、C-15グリッドでは地表下約60cmで地山面となり、当地区地山面が南東方向に向ってかなりの傾斜を示していることが考えられる。

当地区が谷にもかかわらず、縄文時代の遺物が第V層中より少量出土したことは、この谷部分を取り囲む丘陵地域か、あるいはこの谷自身が当時の人間の何らかの行動の場であったことが考えられる。沼原A遺跡検出の土壌が谷沿いにも位置していた事実より、来年度本調査では、C-13グリッド第V層上面で確認された落ち込みを含め、当地区に土壌が検出される可能性もある。
(佐藤甲二)

註 記

註1 仙台市教育委員会『仙台市茂庭住宅団地計画地内文化財分布調査報告書』1977

註2 奥津春生「第一部 環境地学」『大仙台圏の地盤・地下水』 宝文堂 1973

註3 仙台市開発局『茂庭住宅団地環境影響評価 現況編 環境影響評価編』 1976

註4 札幌市教育委員会『札幌市文化財調査報告』 1977

今井啓爾他『霧ヶ丘』霧ヶ丘調査団 1973

発掘参加者

嶺岸倉治・石垣富一郎・細川 隆・太田平治・佐藤 正・住吉惣右エ門・長尾きよみ・大井ふみよ・嶺岸さかえ・板山つねよ・佐藤喜恵子・佐藤いち子・根本ときわ・鈴木みつ子・嶺岸たけよ（以上 本郷・生出地区）、沼田卯太郎・沼田金作・佐藤しげ子・太田恵知子・沼田トシ子・佐藤わくり（以上 梨野地区）、柳沢和明（東北大学研究生）、田中 敏・佐藤広史（東北大学生）、熊谷信一・巻野俊夫・松本寿一・相沢清一・叶 文俊・後藤浩樹（東北学院生）、佐藤栄子・斎藤勇次・斎藤ユキ子（順不同）

原町東部第三土地区画整理事業地区内

遺跡発掘調査報告

調査に至る経過

原町東部第三土地区画整理事業は、仙塩広域都市計画の一環として、昭和49年店より仙台市の直営事業として着手された。土地区画整理事業の内容は、区画道路の建設、土地の区画、形質の変更、及び公共施設の新設又は変更を行なうものである。

工事に際しては、昭和49年秋に事業地内の分布調査を実施し、田子遺跡、鶴巻Ⅰ遺跡・鶴巻Ⅱ遺跡の3遺跡が確認され、その後も地蔵裏遺跡、明屋敷遺跡が確認された。

遺跡にかかる工事は、道路と下水道であるが、昭和52年までに田子遺跡については、立ち会いにより処置された。昭和54年度は、明屋敷遺跡と鶴巻Ⅰ遺跡の調査を予定したが、両遺跡の調査が短期に終了したので、鶴巻Ⅱ遺跡と地蔵遺跡を追加調査した。北屋敷遺跡内の事業内計画地は、現在の生活道とはほぼ一致し、発掘調査の実施が困難であるため、工事に際し、立ち会いにより処置する計画である。

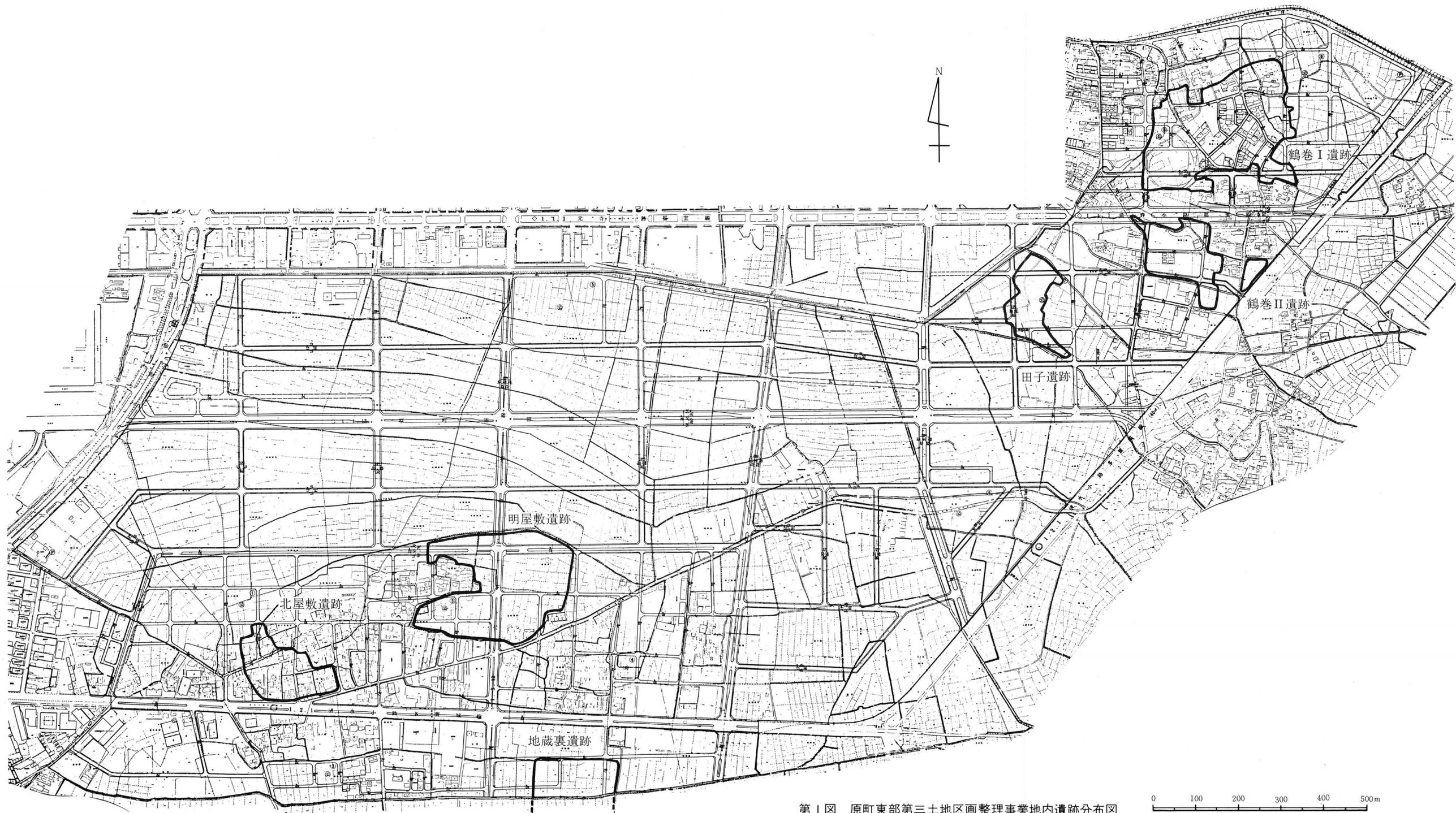
地理的・歴史的環境

原町東部第三土地区画整理事業に係る遺跡群は、東北本線仙台駅の東方5～7.5kmの一帯に6遺跡ある。各遺跡は太平洋の沿線から4～5km離れている。狭義の仙台平野は、標高10m以下の低地帯が太平洋に面して、七ヶ浜から坂元まで半月形に広がり、表層は網状流路と海成砂層で代表される三角州扇状地の特徴を示している。遺跡群は平野の北部、丘陵と海岸との中間の標高2～5mの面に立地している。

遺跡は福田町地区と、六丁目地区に分けられる。福田町地区の3遺跡は、七北田川の南側の低位段丘上、あるいは自然堤防上に立地する。周辺は自然堤防が発達し、その上が集落ないし畑地として利用され、旧河道や浜堤の後背湿地は水田となっている。六丁目地区の3遺跡は、泥炭地帯の微高地上に立地する。点在する微高地上は集落として発達し、宅地を囲んで畑地もみられる。微高地周辺は、広い水田地帯となっている。

原町東部第三土地区画整理事業地区は、北側に隣接する扇町の工業団地の開発にともない、主要道路に沿って企業の進出が年々増えているが、昭和53年に北屋敷遺跡の発掘調査が行なわれるまで、本確的な遺跡は調査は行なわれていなかった。このため当該地区の中世以前の状態、及び遺跡の形成過程については空白となっていた。北屋敷遺跡からは、掘立柱建物跡5棟を含む柱穴多数と、土壇・井戸跡・溝等が密に発見され、江戸時代末から明治時代初期の遺物を中心に、平安時代の土師器・須恵器及び中世陶器も出土しており、平安時代には開発が着手されていたことが考えられるようになった。

近郊の遺跡としては、南方約3kmに弥生時代の藤田新田遺跡、南西約3kmには主軸長110mの前方後円墳である遠見塚古墳を中心とした、弥生時代から平安時代にわたる南小泉遺跡、西方約4kmには陸奥国分寺跡・同尼寺、北方約5kmには古墳時代から中世にわたる鴻ノ巣遺跡がある。



第1図 原町東部第三土地区画整理事業地内遺跡分布図



明 屋 敷 遺 跡

(C - 2 3 4)

遺跡所在地：仙台市六丁目字北屋敷33番地外

調査期間：昭和54年5月14日～5月28日

調査面積：360m²

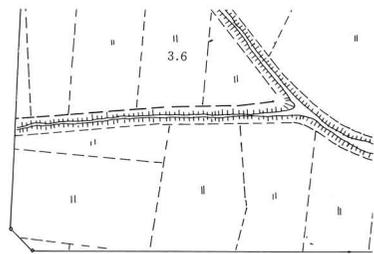
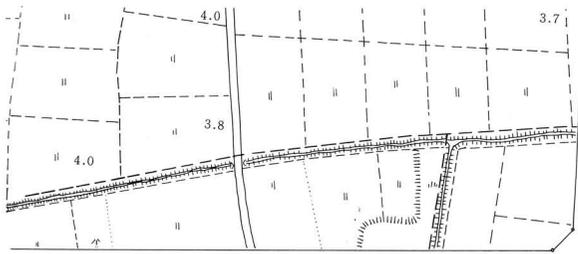
発掘面積：1,000m²

担当職員：木村浩二・工藤哲司・篠原信彦

調査参加者：森 剛男・巻野俊夫・松本寿一・鈴木ひろみ

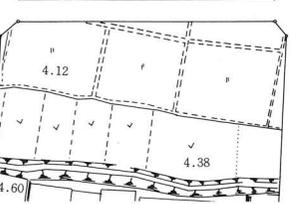
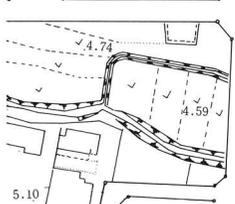
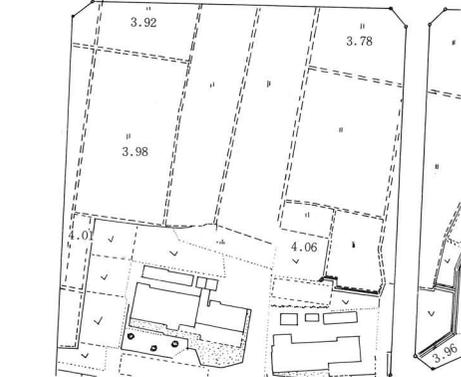
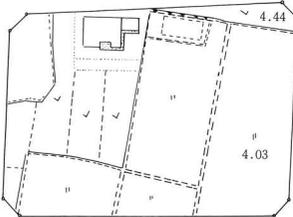
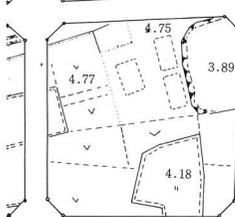
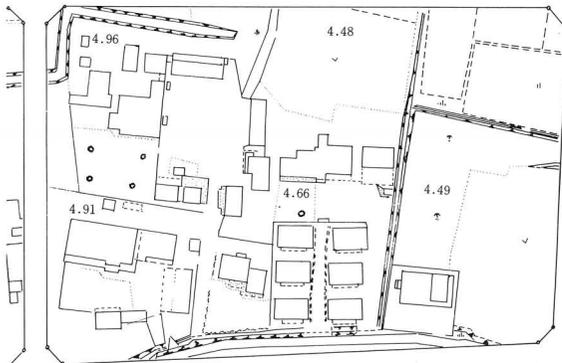
熊谷信一・羽曾部豪美・後藤浩樹・庄子ゆき子

三浦文子・佐藤静枝・佐藤才子

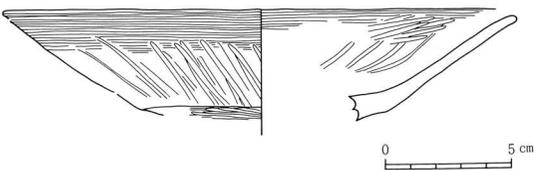


西区

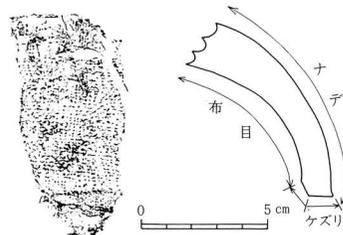
東区



0 100 m
4.25



I号土壇出土高坏



6号溝3層出土 丸瓦

1. 遺跡の立地

明屋敷遺跡は、仙台駅の東方5.5km、仙台市六丁目字北屋敷33番地に所在する。周辺一帯は平坦な水田が広がり、水田面より比高1 m以内の微高地に現在の集落が形成されている。遺跡はこの標高4 m前後の微高地を主体として立地し、畑地では遺物の散布を見ることができる。今回調査した地点は、明屋敷遺跡の縁辺の水田内である。

2. 調査の方法

明屋敷遺跡は、昭和49年に発見されたが、発見当時、道路建設地内はすでに1 m前後の盛土が行なわれ、道路中央線下の下水管理設予定地が、溝状に原地表を留めているに過ぎない状況であった。そこで本調査においては、下水管理設予定地に沿って幅3 mのトレンチを、交差点の東西に各1本設定して調査を実施した。交差点の東側を東区(3×50m)、西側を西区(3×70m)とした。

3. 調査の概要

明屋敷遺跡の基本層序は、第Ⅰ層—表土・20cm、第Ⅱ層—黒色粘土・15cm、第Ⅲ層—黄褐色シルト質粘土・40cm、第Ⅳ層—暗褐色粘土・45cm、第Ⅴ層—黒色粘土(スクモ)・20cm、第Ⅵ層—青色粘土・40cm以上となっている。遺構は第Ⅲ層上面で検出された。

発見遺構は、西区で4条の溝(1～4号溝)と土壇1基(1号土壇)、東区で2条の溝(5～6号溝)がある。

(1) 溝

〈1号溝〉 上面幅約60cm、深さ25～35cm、断面はU字形を呈し、南北方向に延びる。

〈2号溝〉 上面幅80～100cm、深さ30～35cm、断面はU字形を呈す。南側で段が付き、10cm程浅くなる。1号と平行し、南北方向に延びる。

〈3号溝〉 上面幅140～150cm・深さ35cm前後、断面は浅いU字形を呈す。南北方向に延び、東側を4号溝に切られる。

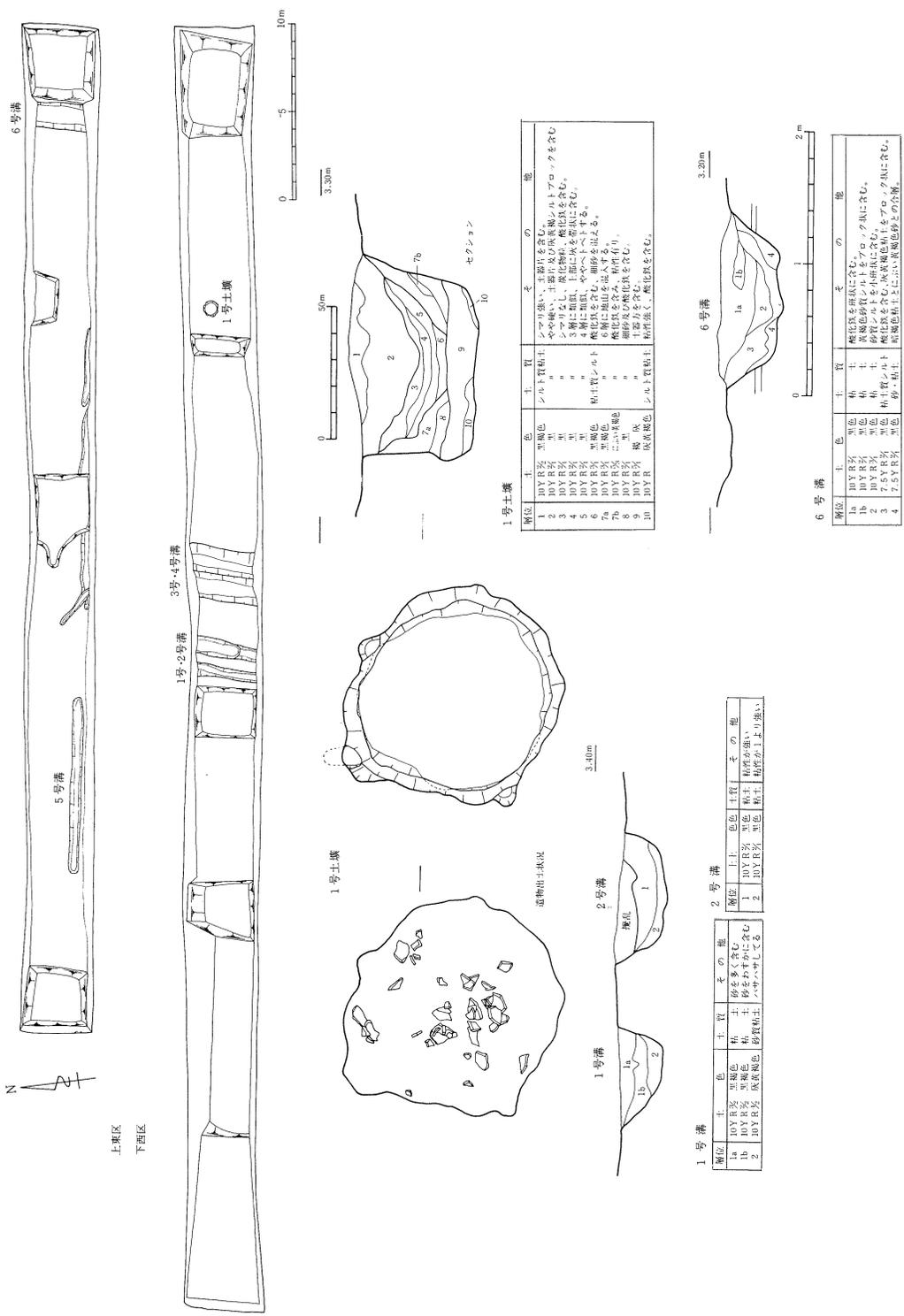
〈4号溝〉 上面幅140～160cm、深さ40～45cm、断面はU字形を呈す。南北方向に延び、3号溝を切る。

〈5号溝〉 上面幅50cm、深さ10cm前後、断面は浅いU字形を呈す。東区の南側に東西方向に、途中5m程切れるが、31m程続く。

〈6号溝〉 上面幅140～150cm、底面幅70～80cm、深さ40～50cm、断面は逆台形状を呈す。南北方向に延びる。3層中より布目の丸瓦片1点が出土した。

溝6条のうち、3・4号溝は、区画整理事業以前の水田に使用された用水路と一致しているので、これの痕跡と考えられる。1・2・5・6号溝については、出土遺物によって時期は判断できないが、3・4号溝と平行または直交する点や形状・堆積等の状況から、水田に伴う用水路の跡

第3図 明屋敷遺跡遺構配置図



1号土溝

層位	土色	土質	その層の
1	10Y R 灰	シルト質粘土	シルト質粘土
2	10Y R 灰	"	やや硬い、土器及び炭化物、酸化鉄を含む。
3	10Y R 灰	"	シヤリなし、酸化鉄、酸化鉄を含む。
4	10Y R 灰	"	3層に類似、上部に灰を帯状に含む。
5	10Y R 灰	"	腐植質を含む。
6	10Y R 灰	粘土質シルト	腐植質を含む、腐敗を出さる。
7a	10Y R 灰	"	6層に堆積を混入する、砂質有り。
7b	10Y R 灰	"	腐植質を含み、砂質有り。
8	10Y R 灰	"	腐植質を含む。
9	10Y R 灰	"	土質力を増す。
10	10Y R 灰	シルト質粘土	粘り強く、酸化鉄を含む。

2号溝

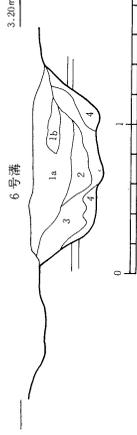
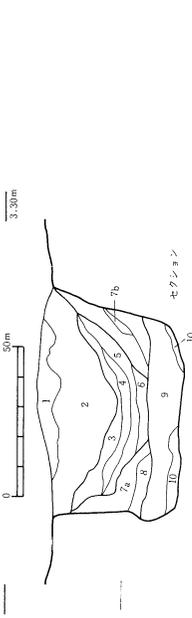
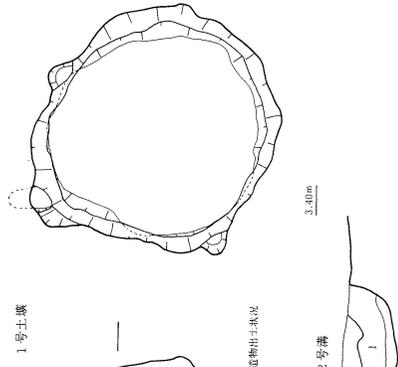
層位	土色	土質	その層
1a	10Y R 灰	粘土	砂を多く含む
1b	10Y R 灰	粘土	砂をおおまかに含む
2	10Y R 灰	砂質粘土	砂質が強い

1号溝

層位	土色	土質	その層
1a	10Y R 灰	粘土	砂を多く含む
1b	10Y R 灰	粘土	砂をおおまかに含む
2	10Y R 灰	砂質粘土	砂質が強い

6号溝

層位	土色	土質	その層の
1a	10Y R 灰	粘土	腐植質を帯状に含む。
1b	10Y R 灰	粘土	腐植質を帯状に含む。
2	10Y R 灰	粘土	腐植質を帯状に含む。
3	7.5Y R 灰	粘土	酸化鉄を含む、炭素を含む。
4	7.5Y R 灰	粘土	酸化鉄を含む。



上東区
下西区

と考えるのが妥当と思われる。

(2) 土 壤

土壌は西区の東部で1基発見された。上面はほぼ円形を呈し、直径約80cm、底面径65～70cm、深さ45cm程を計る。壁の立ち上がりは直立に近く、壁下端部ではえぐれている部分もある。堆積土は、1～10層までの11層に細別される。大別すると、1～2層・3～6層・7a～8層・9～10層の4層からなる。1～8層には多くの炭化物が含まれる。遺物は各層中から出土したが、2層中からの出土が最も多く、その大部分を占める。

出土遺物は全て土師器であり、甕片・高杯片がある。甕は、口縁部・体部・底部の破片があるが図化に足るものはない。口縁部片は、先端が平坦にナデられ、外面は細目のハケメの後ヨコナデ、内面ヨコナデによる調整がされる。体部片はハケメの後にヘラミがキされたものと、ケズリの後にヘラミがキされたものがある。底部片は、直径9cmでわずかな台状部から体部の立ち上がりになるもので、外面はヘラケズリされている。高杯は杯部の破片で、口径20.4cm、現存高4.5cmを計る。外面はヨコナデの後にヘラミがキされるが、口唇部付近はヨコナデ痕がそのまま残る。内面も同様である。杯の底面外側に当る部分はヘラミがキされている。これらの土師器は、東北地方の編年において、南小泉式に相当すると考えられる。(註1)

以上が本調査における発見遺構の概要である。遺構外からは、平安時代の土師器片及び須恵器片、近世以降の陶磁器片が出土している。

4. まとめ

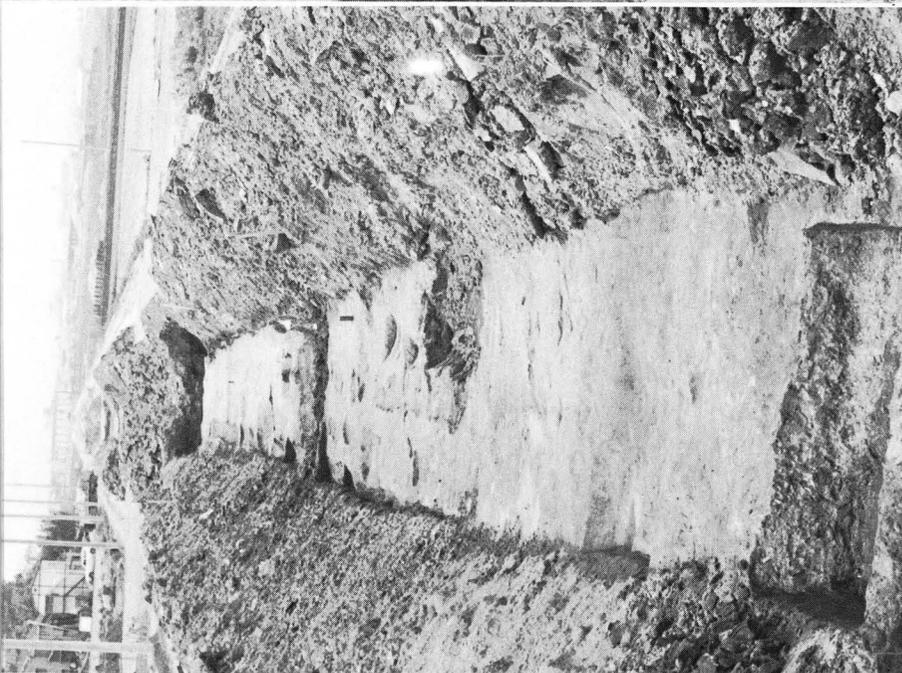
本調査の成果をまとめると次のようになる。

- ① 明屋敷遺跡は、標高4m前後の低地帯の微高地上に立地し、今回の調査地点はその縁辺部に当る。
- ② 6条の溝は、水田の用水路と考えられる。
- ③ 古墳時代の土壌が、遺跡の縁辺部で1基発見された。これにより、本遺跡が古墳時代において集落として形成されていた可能性も考えられる。
- ④ 平安時代の遺構は、今回の調査では発見できなかったが、この時期の遺物が相当量出土しているため、遺跡の中心の微高地上においては、遺構の存在する可能性が強い。

註1 氏家和典 「東北土師器の型式分類とその編年」(『歴史十四輯』昭和30年)



遠景
(北西より)



東区
(東より)



西区
(東より)

1号土壙
遺物出土状況
(西より)



1号土壙
全景
(南より)



1号土壙出土高杯



鶴 卷 I 遺 跡

(C-224)

遺跡所在地：仙台市福室字鶴巻1番11番地外

調査期間：昭和54年6月5日～6月28日

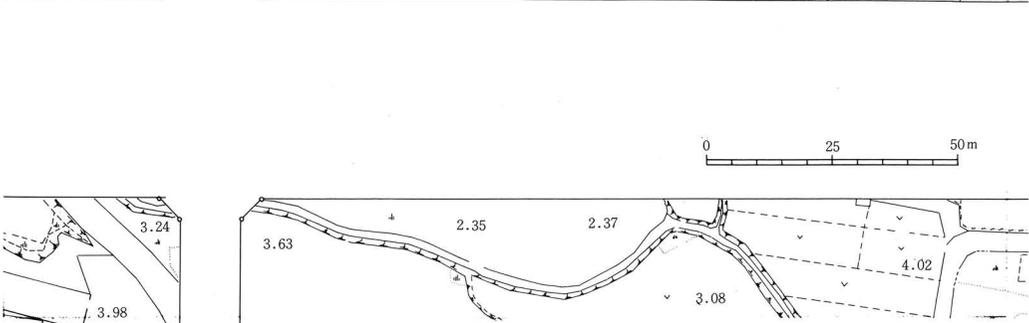
調査面積：約1,700m²

発掘面積：3,992m²

担当職員：木村浩二・工藤哲司

調査参加者：森 剛男・巻野俊夫・松本寿一・熊谷信一

羽曾部豪美・後藤浩樹・鈴木ひろみ



第5図 鶴巻I遺跡トレンチ配置図

1. 遺跡の立地

鶴巻Ⅰ遺跡は、仙台駅の東方約7km、仙台市福室字鶴巻一番に所在する。遺跡は周囲の水田面より1～2m高い自然堤防上に立地し、西側と南側には七北田川の旧河道が水田となって残っている。この旧河道によって分断されるようにして、鶴巻Ⅱ遺跡が南側に隣接する。調査地点は比較的広い耕地となっているが、周辺は宅地化が進んでいる。

2. 調査の方法

鶴巻Ⅰ遺跡は、表面採集できる遺物量は極く少数であったが、立地の点で集落跡の存在が考えられたので、遺跡にかかる道路の半分の調査し、遺構が検出された場合には、部分的、全体的な拡張調査を実施する計画とした。調査地内は、道路の別によってA区からE区に分けた。

3. 調査の概要

各区とも40～60cmで暗褐色シルト質砂の地山面となる。A区で3条、C区で2条の幅2～5mの黒色土の帯が南北方向に検出されたが、調査の結果、地山の暗褐色シルト質砂層の下位にくる層が、基盤の起伏に従って高くなっていた所であることが明らかになった。遺構は検出されなかった。

出土遺物は、土師器・須恵器の小破片が数点出土したに過ぎない。時期は平安時代と考えられる須恵器杯片のほかは、細片のため不明である。

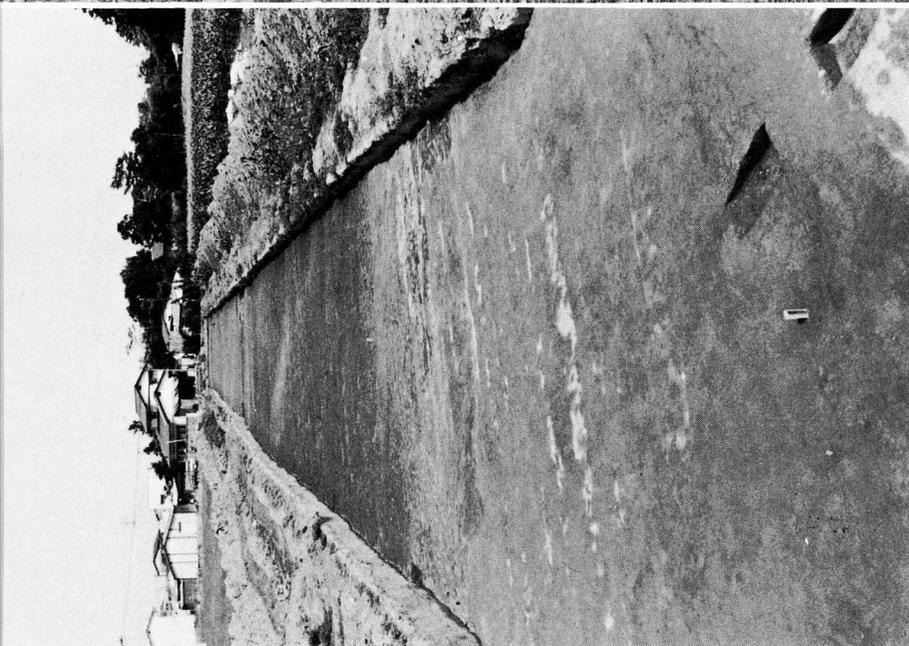
4. まとめ

鶴巻Ⅰ遺跡は、発掘面積の約2分の1の調査を行なったが、遺構は検出されなかった。この結果、道路建設計画地内における遺構の存在は、ほとんど考えられない。

今後、鶴巻Ⅰ遺跡については、遺構が存在した場合にすでに破壊されている可能性と、他遺跡からの自然的営力によって遺物が搬入された可態性についての検討が必要である。特に後者については、近隣の遺跡及び仙台市東辺部の氾濫原上に立地する遺跡を含めた検討を実施する必要がある。



遠景
(西より)



A区
(西より)



E区
(東より)

鶴 卷 II 遺 跡

(C - 2 2 5)

遺跡所在地：仙台市福室字鶴卷 2 番42番地外

調 査 期 間：昭和54年 9 月17日～ 9 月21日

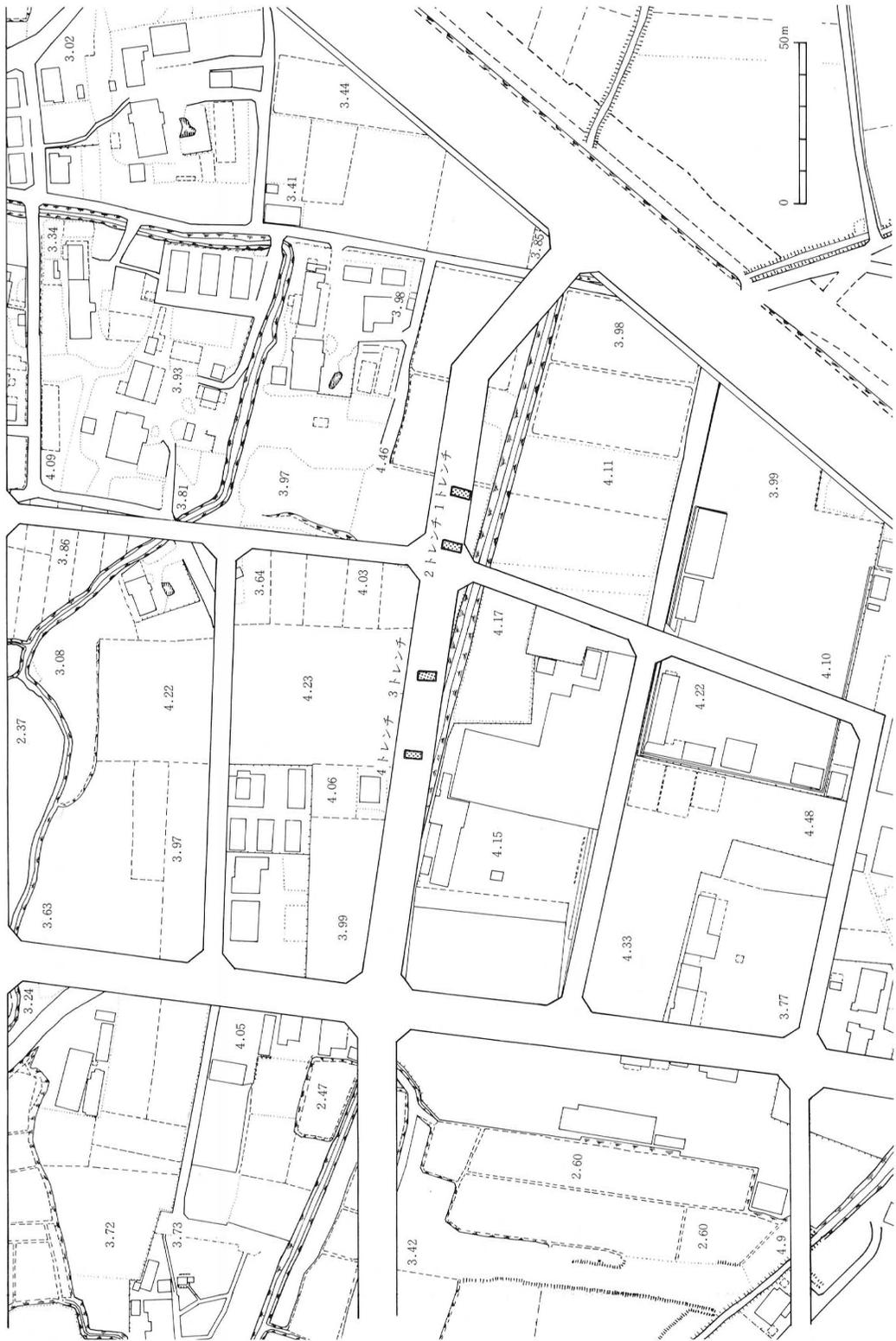
調 査 面 積：72 m²

発 掘 面 積：1,440 m²

担 当 職 員：木村浩二・工藤哲司・

調 査 参 加 者：卷野俊夫・松本寿一・真山尚幸・毛利貴洋・

浅野正人



第6図 鶴巻II遺跡トレンチ配置図

1. 遺跡の立地

鶴巻Ⅱ遺跡は、仙台駅の東方7km、仙台市福室字鶴巻二番に所在する。七北田川の旧河道を隔てて、鶴巻Ⅰ遺跡の南側に隣接する。遺跡は、標高4m前後の旧七北田川の形成した自然堤防上に立地している。堤防上は畑地と宅地となり、周辺は水田となっている。

2. 調査の方法

鶴巻Ⅱ遺跡は、鶴巻Ⅰ遺跡の調査成果から、遺構の存在する可能性が薄いと考えられたので、12m道路内に試掘トレンチを設定し、その結果によって全掘または調査中止の判断をすることにした。トレンチは6×3mの大きさで、12m道路に直交するように4本設定した。東から1・2・3・4トレンチと命名した。

3. 調査の概要

第1トレンチは、地表下65cmで地山となり、遺構は検出されなかった。

第2トレンチは、地表下30cmで地山となり、遺構は検出されなかった。

第3トレンチは、地表下50cmで地山となり、遺構は検出されなかった。

第4トレンチは、地表下50cmで地山となり、遺構は検出されなかった。

基本層序は、第1層が10Y R $\frac{1}{4}$ 褐色シルトの現耕作土で、しまりがなくパサついている。層厚は20cm前後である。第2層は明黄褐色から暗褐色のシルトで、旧耕作土である。しまりがある。

第3層は地山で10Y R $\frac{3}{6}$ にぶい黄褐色シルトである。多少砂を含み、しまりがある。

出土遺物は、土師器の小片が表採されただけである。

4. ま と め

鶴巻Ⅱ遺跡も鶴巻Ⅰ遺跡と同様に、遺構を検出することができなかった。希れに遺物が採集されるが、遺跡の存在する可能性は極めて少ないと考えられる。



遠景
(東より)



1トレンチ
(北より)



4トレンチ
(北より)

地 蔵 裏 遺 跡

(C - 2 3 5)

遺跡所在地：仙台市六丁目字行屋前 6 番地外

調査期間：昭和54年11月7日～11月17日

調査面積：130 m²

発掘面積：1,300 m²

担当職員：工藤哲司

調査参加者：小野寺弘純・佐瀬次男・角田健一・

今野靖夫・舟山高弘・栗原良一

1. 遺跡の立地

地蔵裏遺跡は、仙台駅東方約6km、仙台市六丁目字行屋前6番地に所在する。北屋敷遺跡、明屋敷遺跡から1km以内で南側に位置する。明屋敷と荒井の集落の間に広がる標高3.5m程の平坦地に立地し、現状は水田となっている。

2. 調査の方法

地蔵裏遺跡は、水路の保修工事の際に中世陶器片が出土するに及んで発見されたが、遺跡の範囲は不確実なものであった。そこで、本遺跡は数トレンチを入れて予備調査を行ない、遺構が検出された場合に、本調査を実施することにした。トレンチは、東側の8m道路に3×5mトレンチ3ヶ所、西側6m道路には南北に4×4mトレンチ3ヶ所、東西に3×6mトレンチ2ヶ所を設定した。

3. 調査の概要

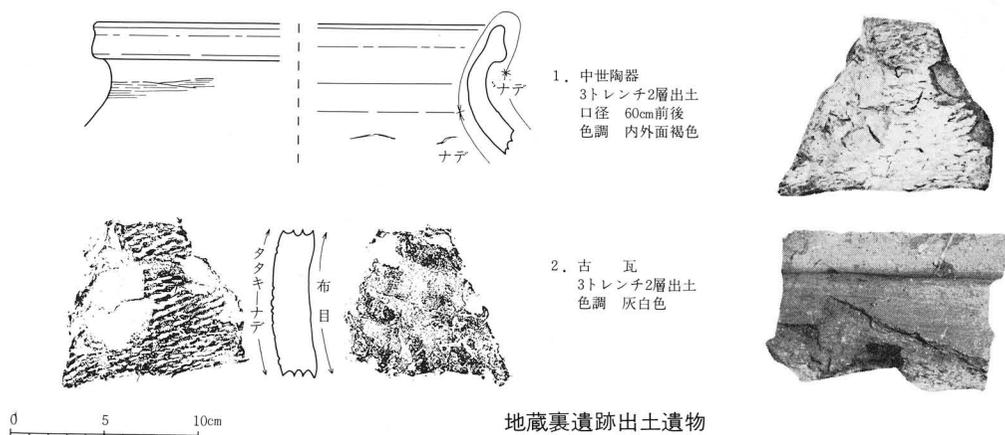
各トレンチとも20~40cmで10Y R $\frac{5}{3}$ にぶい黄褐色砂質粘土の地山となる。遺構は検出されなかった。

基本層序は、第1層は10Y R $\frac{3}{2}$ 黒褐色シルト質粘土の現耕作土、第2層は黒褐色が黒色の粘土、第3層は酸化鉄を含んだ粘土ないし粘土質砂層である。その下が地山となる。

出土遺物は、3トレンチの2層中から、古代の平瓦片1点と、中世陶器の口縁部1点が出土した。

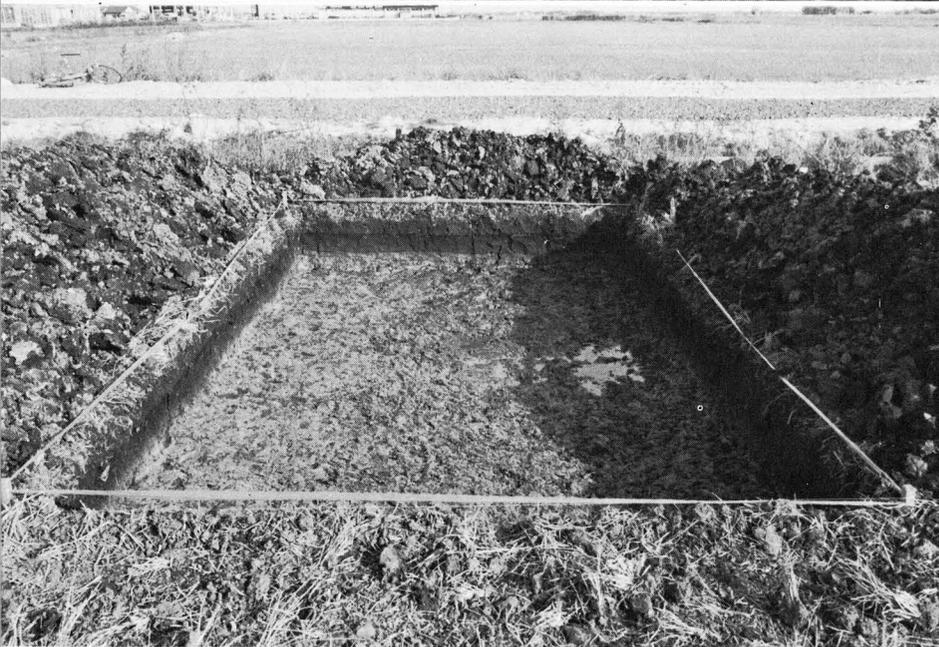
4. ま と め

道路予定地内の各トレンチ内から遺構は検出されず、他の部分からの遺構の発見の可能性も少ない。地下50cmでは湧水もあり、また凹地は降水が溜りやすく、集落立地としては適地と考えられない。ただし、第3トレンチより南側の地点は、以前にも中世陶器が採集されているので、今後とも注意が必要であろう。

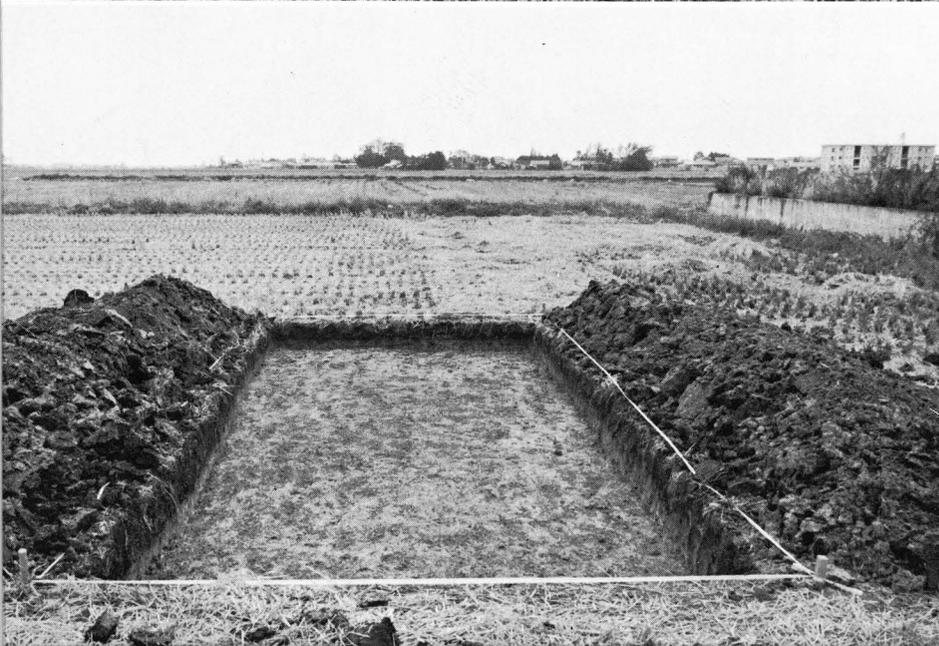




遠景
(北より)



1トレンチ
(西より)



8トレンチ
(北より)

仙台市文化財調査報告書刊行目録

- 第1集 天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集 仙台城（昭和42年3月）
第3集 仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年3月）
第4集 史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集 仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集 仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集 仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集 仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集 仙台中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年3月）
第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集 南小泉遺跡一範囲確認調査報告書一（昭和53年3月）
第14集 栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集 六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集 北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集 柞江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集 仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集 仙台市開発関係遺跡調査報告1（昭和55年3月）
第22集 経ヶ峯（昭和55年3月）
第23集 年報 1（昭和55年3月）

仙台市文化財調査報告書第21集

昭和54年度

仙台市開発関係遺跡調査報告 I

昭和55年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL 63-1166

